

大いに学んで世界に羽ばたけ

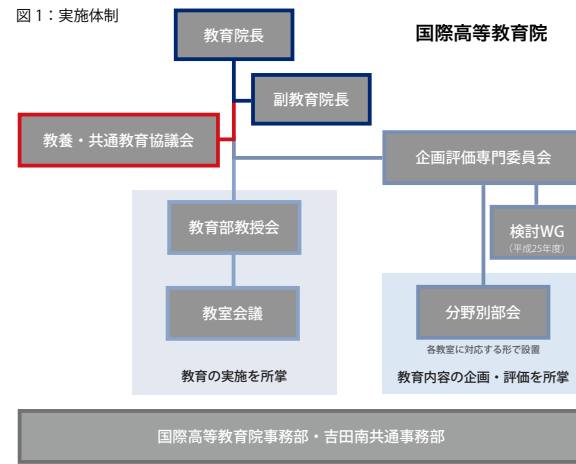
—新しくなった教養・共通教育—



京都大学 国際高等教育院

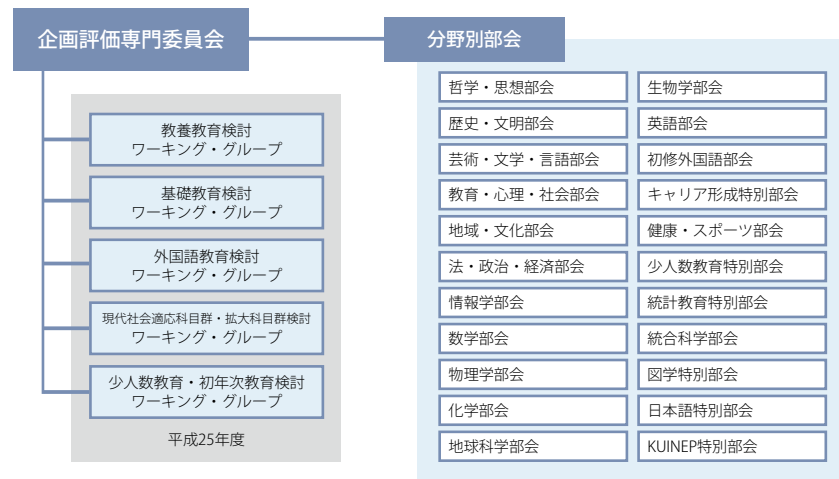
はじめに

本学の教養・共通教育は、時代の要請に応じて改革を積み重ねてきましたが、平成25年度からは国際高等教育院(以下、「教育院」という)の設置という、大きな組織変更を伴う改革に着手しました(図1:実施体制)。平成24年度までは、高等教育研究開発推進機構が教養・共通教育の企画を担当し、実施責任部局である人間・環境学研究科と理学研究科が中心となって授業を担当する体制でしたが、企画と実施を分離した体制では教育改革に限界があることから、企画と実施を一元的に担う教育院を設置することとしたものです。進展著しい国際化への対応や、高大接続、専門教育との接続等、教養・共通教育は大きな課題に直面しており、従前以上に機動的な全学体制の下で改革を進めることが目標とされました。



教育院では、企画評価専門委員会、及びその下におかれたワーキング・グループにおいて教養・共通教育の改革の方向性に関して検討を重ね、その結果を、平成26年3月に「教養・共通教育の改善に向けて 一企画評価専門委員会WG報告集」としてまとめました(図2:検討体制)。この報告に対し全学から寄せられた意見を踏まえつつ、教育院では具体的な改革案に関してさらに検討を重ね、一部は平成27年度より実施しましたが、その大半については平成28年度入学生から実施することとしました。以下においては、これらの改革内容についてご報告し、皆様の一層のご協力をお願いしたいと考えています。

図2: 検討体制



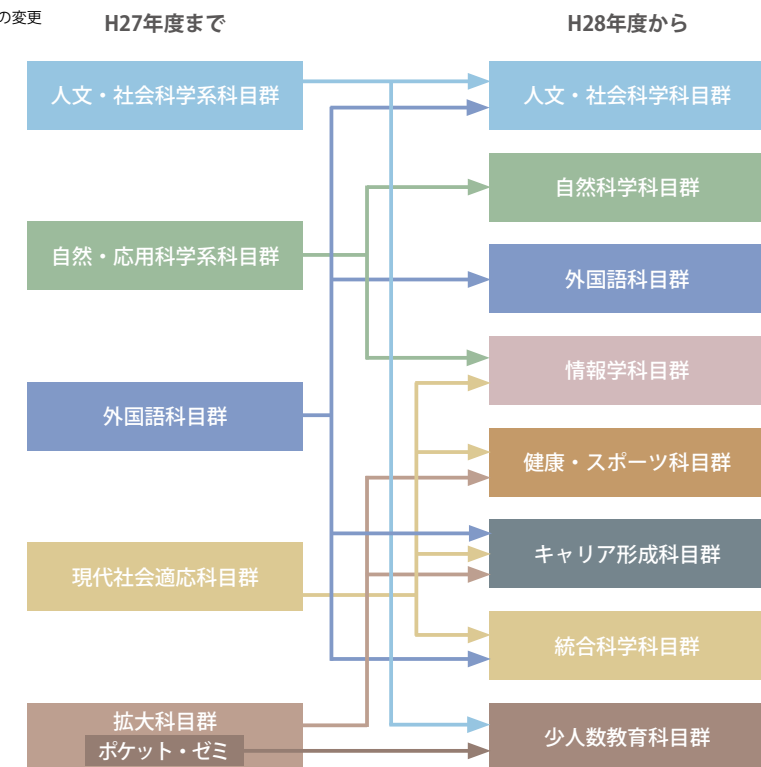
1 科目群と科目の見直し

今回の改革においては、ほぼすべての分野について開講科目を見直し、科目自体の廃止のほか、内容や科目名の変更、新規科目の追加等をかなりの規模で行いました。その際の基本的な観点は、社会の変容や国際化への対応、高校教育との接続、専門教育との接続等ですが、同時に、学生が自らの履修計画を容易に立てることができ、且つ、できるだけ希望どおりの科目履修が可能となるカリキュラムを目指しました。そのため、後述するとおり、新たな時間割の導入なども行っています。

また、科目の見直しに伴い、科目を区分する科目群も見直し、従来の5群から8群へと再編しました(図3:科目群の変更)。従前の現代社会適応科目群及び拡大科目群には多種多様な科目が含まれていましたが、これら2群を廃止し、内容的なまとまりを考へて、情報科学科目群、健康・スポーツ科目群、キャリア形成科目群、統合科学科目群、少人数教育科目群を新たに編成しました。これらの中には、従前から開講されていた科目も含まれますが、統合科学やILAS(アイラス)セミナーなど、新たな科目も含まれます。また、人文・社会科学科目群、自然科学科目群、外国語科目群は、そのまま維持していますが、これら科目群の科目についても、上記の方針に基づき、大幅な科目の見直しを行いました。

ここでは、個々の科目の変更すべてについて説明することはできませんが、いくつかの重要な変更について触れておきます。

図3: 科目群の変更



(1) 教養科目の見直し

人文・社会科学を中心とする教養科目については、従来、多種多様な科目が提供されてきました。これは、学生に選択の可能性を与えるものであり、また、多様な分野への誘いを可能にするものですが、他方、入学直後の学生にとって多種多様な科目の中から履修科目を選択することは困難であり、また、時間割が過密なため、履修したい科目を選択できる可能性が保障されているわけでもない、という問題がありました。

以上のような状況を改善するため、今回の改革においては、高校教育との接続を念頭に、多様な学問分野にはじめて触れる入学直後の学生に対し、それぞれの学問分野における問題関心や学問的方法論に関する理解が可能となるような基礎的な科目を中心として科目編成することとし、加えて、当該分野に関心をもった学生がさらに学習を深めるための各論的な科目を提供する2段構えの編成としました(図4:日本史関係科目一覧)。

図4:日本史関係科目一覧

従来の科目名	授業形態	単位数	平成28年度科目名	授業形態	単位数	備考	
基礎			基礎				
日本史IA	講義	2	日本史I	講義	2	5コマ開講 (科目統合)	
日本史IIA	講義	2	日本史I	講義	2		
日本史IIIA	講義	2	日本史I	講義	2		
日本史IIB	講義	2	日本史I	講義	2		
日本史IIIB	講義	2	日本史I	講義	2		
日本史III	講義	2	日本史II	講義	2	5コマ開講 (科目統合)	
各論			各論				
室町幕府と守護制度	講義	2	日本史II	講義	2		
院政と仏教	講義	2	日本史II	講義	2		
前近代日本の法と秩序	講義	2	日本史II	講義	2		
日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナールIB	講義	2	室町幕府と守護制度	講義	2		
日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナールIIB	講義	2	院政と仏教	講義	2		
日本古代・中世の歴史社会	講義	2	前近代日本の法と秩序	講義	2		
日本古代・中世政治文化論	講義	2	日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナールI	講義	2		
日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナールIA	講義	2	日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナールII	講義	2		
日本古代・中世政治文化論基礎ゼミナールIIA	講義	2	Japanese Intellectual History I-E2	講義	2		
			Japanese Intellectual History II-E2	講義	2		

「基礎」については、同一科目を複数クラス設けることで、過密な時間割の中でも学生が希望に従って選択できるように配慮しています(図5:人文社会科学基礎科目時間割(例示))。その際、同一科目であっても、複数の教員が担当するため、それぞれのクラスで扱われる素材が異なることはありますが、どのクラスでも当該分野の問題関心や学問的方法論といった点で共通の理解が得られるようにしています。

図5:人文社会科学基礎科目時間割(例示)

前期	月	火	水	木	金
1限			論理学I 東洋社会思想史I 西洋史I 国語国文学I 漢文学I 生態人類学I 都市空間論 法学		
2限	西洋社会思想史I 日本史I 日本史I 東洋史I 国語国文学I 芸術学I 心理学I 心理学I 社会学I 地域地理学 法学 経済学I	東洋史I 音楽芸術論I 心理学II 心理学II 生態人類学I 自然地理学 法学 政治学I			
3限	宗教学I 哲学I 日本史I 東洋史I 芸術学I 言学I 東洋美術史 教育学I 社会学I 人文地理学 日本国憲法 政治学I 経済学I			科学論I 東洋史I 西洋史I 言学I 教育学I 教育学I 社会学I 文化人類学I 日本国憲法 政治学I	論理学I 京都学派の伝統と可能性 日本史I 西洋史I 現代文明I 日本近代文学I 漢文学I 教育学I 心理学I 社会学I 政治学I 経済学I
4限					倫理学I 日本史I 現代文明I 日本近代文学I 心理学II 精神分析学 人文地理学 経済学I
5限	ドイツ文学 教育学I 日本国憲法 経済学I	哲学I 西洋史I 国語国文学I 言語科学I 文化人類学I	論理学I 東洋史I 言語科学I 地域地理学 都市空間論 経済学I	東洋社会思想史II 国語国文学I	行動病理学I

「日本史I」



(2) 基礎科目の見直し

主に理系の学生が受講する、数学、物理学、化学、生物学、地球科学、統計といった基礎科目についても、高校教育との接続、また、それぞれの専門教育との接続という観点から内容を精査し、必要な科目の再編を行いました。

数学

演義レポート



「微分積分学」

数学では、一部の学生を除き、講義と演義の組み合わせによる授業形式へと変更しました。すなわち、平成27年度から理学部生について、平成28年度からは残りのほとんどの理系学生についても、講義クラスに連携させて、講義クラスの半分の人数から成る演義クラスで授業時間内の演習とレポート課題による自宅学習支援を行います。これにより、より効果的な指導が可能になると見込めます。



全学共通科目レポートBOX

化学



留学生を含む学生に英語で指導する「基礎化学実験 (Fundamental Chemical Experiments-E2)」

化学では物理化学の基礎を半期で概観する「基礎物理化学要論」を平成27年度から、外国人教員が英語を用いて指導する「基礎化学実験 (Fundamental Chemical Experiments-E2)」を平成28年度から、新規に開講しました。これらの講義の新設で、多様な学生の要望に対応しながら、新時代を生き抜く学生を育てることを目指しています。



「生物・生命科学入門」

生物学では、入門的講義を「生物・生命科学入門」(前期)と「個体と集団の基礎生物学」(後期)、「細胞と分子の基礎生物学」(主に後期)の3つに整理統合し、高校における生物の履修状況によらず、生物学の基礎を理解し、多岐にわたるより高度な生物学諸領域へと円滑に進めるようにしました。

生物学

物理学



「放射線に関する実験」



「磁性に関する実験」

物理学では、科目構成に変更はありませんが、大きな変更点として「物理学実験」のテーマを平成28年度から2年かけて、更新する予定です。特に理学研究科の教員も加わって、放射線に関する実験、磁性に関する実験を新たに設け、従来行ってきた幾つかのテーマを廃止することになります。また、物理学実験の教科書も平成28年度版から、実験の目的・概要を明確にして新入生にも分かり易い記述に改訂しました。更に、平成28年度後期から、外国人教員による英語での実験の指導も始まります。

テーマ「堆積・古生物」
丹波層群の堆積岩から岩石試料を採取し、
実験室で微化石を探し出して年代を推定



テーマ「気象」
既存の観測機器を用いずに、身の回りのものを用いて気象パラメータを測る

テーマ「地球流体」
ロウを用いたプレート運動の模擬実験



テーマ「地震」
熊本地震の地震波の解析から地震断層の性状を探る



地球科学

地球科学では、高校における地学の履修状況によらず、地球科学の面白さに触れながら、学修を進められる科目構成にしました。講義科目だけでなく、「地球科学実験」や「探究型地球科学課題演習」といった実習系科目も充実させました。特に後者は、平成27年度から開講した発展型の演習科目であり、受講生は複数の演習テーマ(写真参照)から1つを選択し、少人数の班に分かれて半期をかけて取り組みます。教員や仲間と議論しながら、学生自ら演習の計画策定、実験／観測、結果の解析・考察を主体的に行い、最後に全員の前で成果発表をします。こうした演習を通じて、学修や研究に対する主体性、地球科学的な事象への深い理解、理学的な思考や洞察力を育むことを目指しています。



テーマ「岩石」
高温高圧実験により、火成岩を生成したマグマを作り出す

統計に関連する科目については自然科学科目群に「統計」という分野を新たに設けるとともに、「統計入門」という科目を平成27年度から新設しました。この科目では実際のデータを扱う上での統計的な考え方を重視し、統計ソフト JMP についてはライセンスを取得し、学生の保有する PC にインストールして課題などに使っています。

統計

(3) 英語科目の見直し

教育院では、研究環境や卒業生に対するニーズの国際化といった変化に対応するため、学生の英語力をさらに向上させるとともに、教育・研究環境の国際化を進展させることが重要であると考えています。そのため、英語教育に関しては、従前からの「一般学術目的の英語」という考え方を基礎にしつつ、英語によるコミュニケーション力をさらに向上させるとともに、学生がより積極的に英語に取り組める科目編成となるよう配慮しました。具体的な変更内容は以下のとおりです。

平成27年度までは、1年次においてリーディングの授業とライティングの授業を前・後期にわたり、それぞれ1つずつ(合計4科目)受講し、2年次において、英語Ⅱとして提供される授業を2つ受講することとされていました。これに対し、平成28年度からは、1年次において、リーディングの授業と、ライティング-リスニングの授業を前・後期にわたり、それぞれ1つずつ(合計4科目)受講するとともに、2年次の英語Ⅱは廃止して、E科目を2科目受講する制度へと変更しました(図6:H28からの英語教育)。

図6:H28からの英語教育

1回生前期	1回生後期	主として2回生～
英語リーディング 2単位	英語リーディング 2単位	E科目
英語ライティング-リスニングA 2単位	英語ライティング-リスニングB 2単位	
TOEFL ITP (4月に実施)	TOEFL ITP (12月に実施)	

E科目とは、英語力強化に資する科目として教育院が指定した科目であり、具体的には、英語テキストの講読を中心的な内容とする科目(E1)、英語を使用言語として実施される科目(E2)、英語スキルの向上を目的とする科目(E3)から構成されています(図7:E科目のカテゴリー)。従前、英語Ⅱとして開講されていた科目の多くは、E1科目へと移行しますが、従前の授業がそのまま引き継がれるのではなく、担当教員の専門的知見に依拠した教養的内容へと改変されます。このように、英語Ⅱは廃止されますが、このことは英語教育の軽視を意味するものではなく、学生のニーズに応じた英語学習の選択肢の拡大が意図されています。

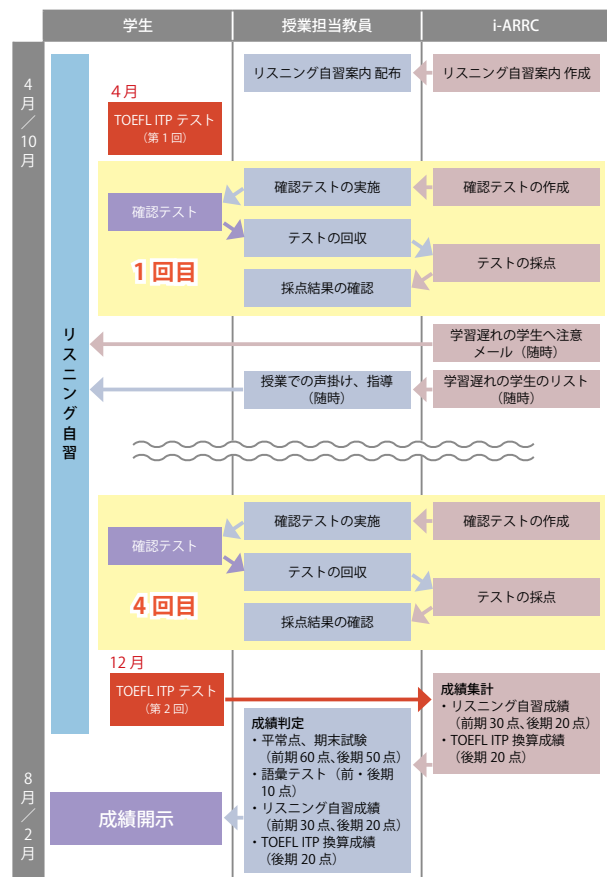
図7:E科目のカテゴリー

E科目には次の3つのカテゴリーがあります。E1、E3カテゴリーは対象回生が2回生以上の科目です。

E1	英語テキストの講読を中心的な内容とする科目 (英文学、英語圏の文化の教授、あるいは学部が英語を用いて専門的内容を教授する)
E2	英語を使用言語として実施される科目 (原則として外国人教員が英語による授業を行う科目)
E3	英語スキルの向上を目的とする科目 (英語を用いた討論、発表などの技術力向上を目指す科目)

1年次のライティング-リスニングの授業については、クラス人数を半減させて1クラス20名とし、教員によるきめ細かな添削指導が可能となるよう配慮するとともに、GORILLA(語学学習支援システム)によるWEBでのリスニングの自習と授業での4回の確認テストを組み合わせ、教育効果を確保することとしました(図8:ライティング-リスニング授業の流れ)。リーディングの授業については、授業担当教員と学部教員との協議を通じて、当該学部の学生が興味をもてるような内容のテキストが選択されるよう配慮しています。

図8:ライティング-リスニング授業の流れ



また、ライティング-リスニング、リーディングいずれの授業についても、同一学部、学科等の複数のクラスが同一曜時に配置されるようにし、同一曜時間の授業を担当する英語教員がチームを組んでFD*1に取り組むこととしています。それぞれの曜時間についてチーム・リーダーを決め、その教員がまとめ役となり、学部との連携の下で英語授業を改善していくこととなります。なお、教員の中に英語のネイティブ・スピーカーが含まれるようにし、学生が1年次の間に一度はそのような教員の授業を受講できるようにしています。

さらに、1年次の4月と12月には、TOEFL ITPの試験を実施し、学生が自らの英語能力の一面を測れるように配慮するとともに、12月実施のTOEFL ITPの成績を、「ライティング-リスニングB」の授業の成績評価に反映させることを通じて、学生が英語に取り組む動機付けとなるよう配慮しました。

*1 FD (Faculty Development) = 教員が授業内容・方法を向上させるための組織的な取組



「英語ライティング-リスニング」



GORILLAログイン画面

なお、平成28年度から、教育院の附属センターである国際学術言語教育センター(i-ARRC)では、国際人材総合教育棟において、学生が語学の自習を行えるように、各種のサービスを提供します。各種機材の貸し出し、自習スペースの提供、外国人教員による学習相談、休業期間中における各種コースの提供などを行います。また、教育棟の地階には、TOEFL iBTを実施できる部屋を設置しており、学生が同テストを学内でも受験できるようにする予定です。

以上のように、1年次における英語教育を強化し、自習環境も充実させましたので、学生は、1年次において集中的に英語能力の向上に取り組めるものと考えています。

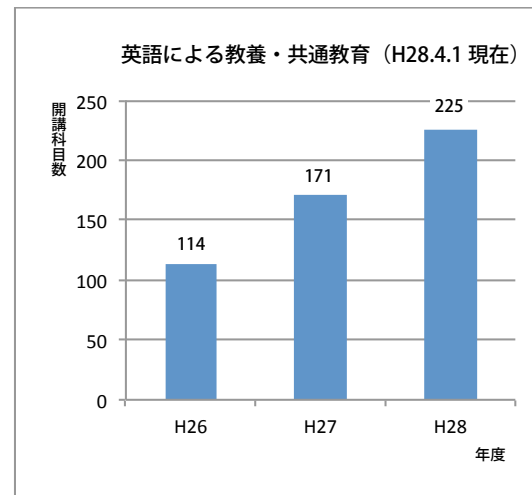
2 英語で実施する科目の充実

教育院では、文部科学省の大学改革強化推進事業補助金の援助を受け、平成26年度から英語で実施する科目を増加させています。その結果、平成26年度は114科目、同27年度は171科目が英語で実施され、本年度(平成28年度)は225科目に達します(図9:英語による教養・共通教育開講科目数)。これらの科目の大半は、外国人教員によって担当されており、これらの教員は、それぞれの研究科、研究所等に所属し、学部や研究科の専門教育においても授業や研究指導を担当しています。このような取り組みにより、教養・共通教育だけでなく、本学の教育・研究環境全体に関して、国際化への対応が促進されることが期待されます。

英語で実施される科目も、日本語で実施される科目と同様に、それぞれの科目群に配置されており、多くの科目について、日本語で学ぶか、英語で学ぶかの選択が可能となるよう配慮しています。これにより、日本人学生が英語環境に順応する機会が拡大されるとともに、日本語能力が十分でない留学生の受入も従前以上にスムーズになることが期待されます。

前述のとおり、従来2年次に配置していた英語IIが廃止され、E科目を受講する体制となりました。外国人教員により英語で実施される科目の多くがE2科目として指定されており、希望する学生は、英語テキストを使用するだけでなく、授業のすべてが英語で実施される科目を履修することで、英語力の強化を図ることも可能となります。

図9: 英語による教養・共通教育 開講科目数



3 少人数教育と学際教育の充実

(1) ILASセミナーの新設

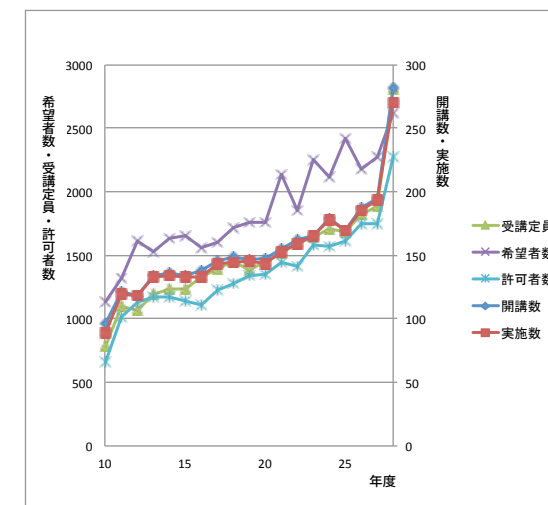


「巨大分子セミナー」



「Physical Computing入門」

図10: ILASセミナー(ポケット・ゼミ)の推移(H10~H28)



京都大学では、従前よりポケット・ゼミと称する少人数ゼミが開講されてきました。少人数ゼミにおける教員や他の学生との対話は、学問の意義や楽しさを実感する良い機会であり、また、それを通じて高校までの受け身の学習から、大学での主体的な学習への移行を容易にします。教育院では、このような少人数ゼミの意義を高く評価し、平成28年度からはILASセミナーとして衣替えし、その開講数を大幅に増加させるとともに、ほとんどの授業を5時限目に配置することでより履修しやすくしました(図10:ILASセミナー(ポケット・ゼミ)の推移)。また、内容的にも、初年次学生が学問の世界へと踏み込むための作法や技法に関しても伝えるよう配慮しています。さらに、英語で実施される授業も用意して、英語力も高めたい学生のニーズにも応えることとしています。

4 その他の科目の見直し

(2) 統合科学の新設

現代社会は、環境問題やエネルギー問題等、多様な問題に直面しています。これらの問題に対応するためには、学問分野を横断する複眼的な視点が必要になりますし、とりわけ文理融合的な考察が求められます。それにより、選択肢が複数存在する中から一つの政策を決定することが求められます。こうした課題を対象として、本学では平成28年度から「統合科学」という科目を新規に開講することとしました。専門を異にする複数の教員が授業を担当することで、複眼的な視点の必要性に気づいてもらえるよう配慮しています。具体的には、生命科学をめぐる問題、環境問題、自然災害をめぐる問題、エネルギー問題、資源問題を取り上げます(図11:H28統合科学科目開講一覧)。いずれも後期の5時限目に配置し、前期の5時限目に配置しているILASセミナーと同様、学生が履修しやすいように配慮しています。

図11：H28 統合科学科目開講一覧

科目名	曜時限
統合科学：生命と社会（生命科学の進歩と人の生活）	月5
統合科学：生命と社会（生命科学の進歩と人の生活）	火5
統合科学：生命と社会（生命科学の進歩と人の生活）	水5
統合科学：生命と社会（生命科学の進歩と人の生活）	金5
統合科学：生命と社会（自然と人の関わり）	月5
統合科学：生命と社会（自然と人の関わり）	火5
統合科学：持続可能な地球社会を目指して（エネルギー消費と環境）	木5
統合科学：閉じた地球で生きる（エネルギー消費と環境）	火5
統合科学：閉じた地球で生きる（エネルギー消費と環境）	金5
統合科学：総合自然災害科学	月5
統合科学：総合自然災害科学	水5
統合科学：総合自然災害科学	木5
統合科学：地球環境と人類とのバランス	水5
統合科学：資源循環と環境	月5
統合科学：エネルギーを取り巻く環境	木5

情報学科目群

情報学に関する基礎科目にはICTスキルの学習を中心とする演習科目と、情報学についての概念的知識を教授する科目などが行われていましたが、対象とする学部、学科ごとに異なった科目名称と発給単位数で実施されてきました。これをICTスキルを学習する科目については「情報基礎演習」に名称を統一するとともに、発給単位数も2単位に統一しました。また概念的知識を教授する科目については「情報基礎」に名称を統一しました。科目の実施は理系学部はクラス指定で実施され、内容も学部、学科ごとのニーズに合わせて調整されていますが、科目内容や評価の基準などを作成しています。情報教育については情報倫理、情報セキュリティの教育も不可欠ですが、本学では全構成員に情報セキュリティe-Learningの受講を義務付けていることから、授業ではe-Learningの受講を促すとともに単元に関連した事項の解説などを行うようにしています。

健康・スポーツ科目群

平成27年度までは、異なる科目群で実施されていた健康系の講義科目とスポーツ実習科目について新たに健康・スポーツ科目群として統一し、健康系の基礎科目としては「健康科学」「運動科学」「健康心理学」（それぞれⅠ、Ⅱ）として実施しています。また、平成26年度に試行的に行ったAEDなどについての救護講習は平成27年度からは新入生のガイダンスで実施しています。

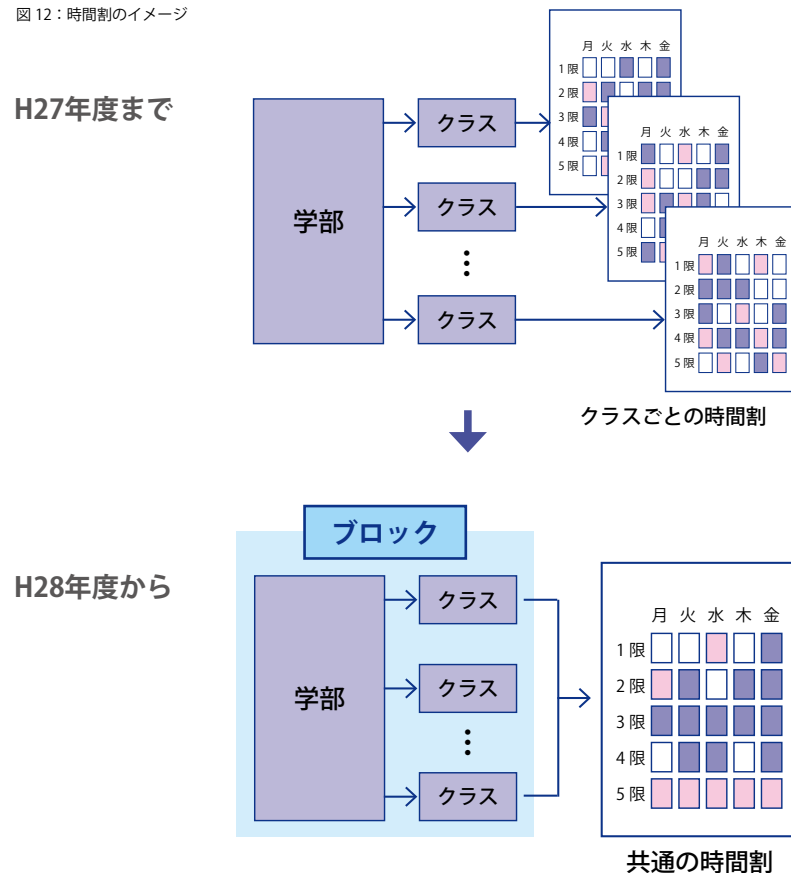
キャリア形成科目群

この科目群にはコンプライアンスや国際コミュニケーションの科目などいくつかの系統の科目があります。ビジネス英語など英語力の強化に資するものの、英語科目としては位置付けられていない科目があり、このような科目については、年次進行を考慮して平成29年度からE3科目として実施します。

5 時間割のブロック化

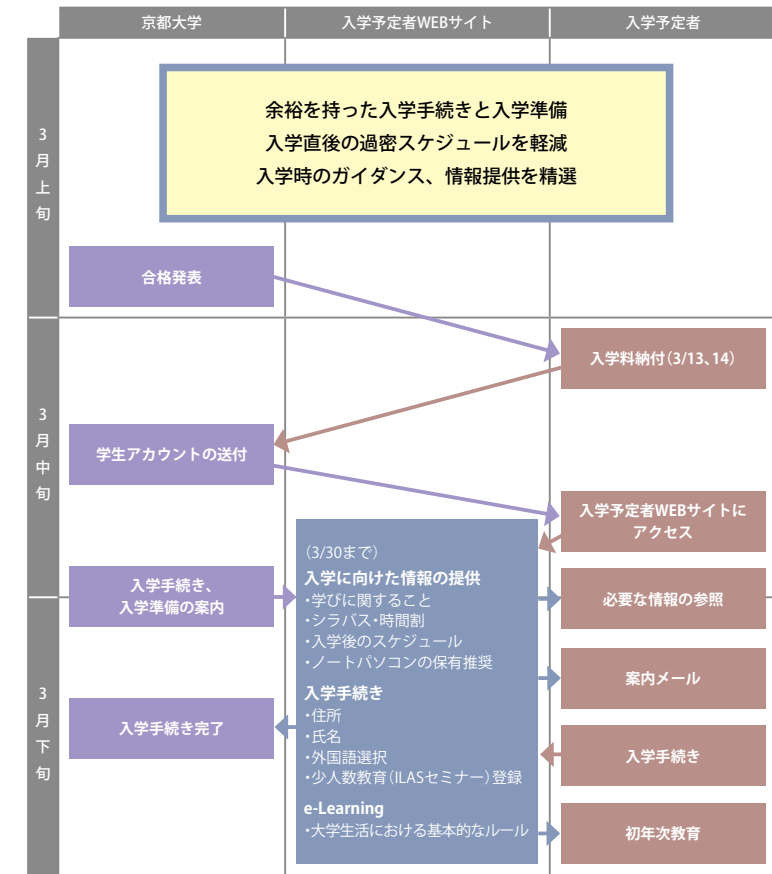
平成27年度までの時間割は、基本的に担当教員が希望する曜時限を基礎として、クラス指定科目の重複等が生じないように配慮して作成されていました。しかし、理系学生については、クラス指定の基礎科目が多く、選択科目を履修できる曜時限は限られているため、科目選択の可能性が極めて乏しい状況でした。そこで、平成28年度から時間割を一新し、全学生を主として学部又は学科を単位としてブロックに区別して、それぞれのクラス指定科目の曜時限が重複しないようにするとともに、選択科目を配置する曜時限を確保してそれとも重複しないようにしました(図12:時間割のイメージ)。その結果、担当教員にとっては、必ずしも希望する曜時限に開講できない場合も生じることとなりましたが、学生にとっては、選択肢が大幅に拡大することとなりました。また、前述のとおり、外国語の授業については、同一曜時限に同一学部や学科の外国語等の授業が一斉に実施されるため、担当教員がチームを組んでFDを実施し、あるいは、連携して授業を進めることも可能となりました。

図12:時間割のイメージ



6 入学予定者への早期対応

図13:合格発表からの流れ



時間割の見直しにより、入学後のクラス編成を待たずに自由選択科目などの履修を検討できるようになりました。そこで、平成28年度入学生から、合格発表後、学生アカウント(ECS-ID)を発行し、できるだけ早い時点から本学のホームページを閲覧して、本学の規則や制度を知ってもらうとともに各種手続きをWEBサイトでできるように、配慮しました(図13:合格発表からの流れ)。従来のポケット・ゼミでは履修希望の提出日程が入学後で、第1週目の開講が難しいという問題がありましたが、ILASセミナーでは、入学前にWEBサイトで希望を提出できるようにすることでこの問題を改善しました。入学前からのWEBサイトの提供により、新入生が希望に応じた履修計画をじっくり組み立てることに資するものと期待しています。

7 課外学習への対応強化と学習環境の整備

教育院には、国際学術言語教育センター(i-ARRC)と日本語・日本文化教育センターという二つの附属組織が存置されています(図14:附属センター)。

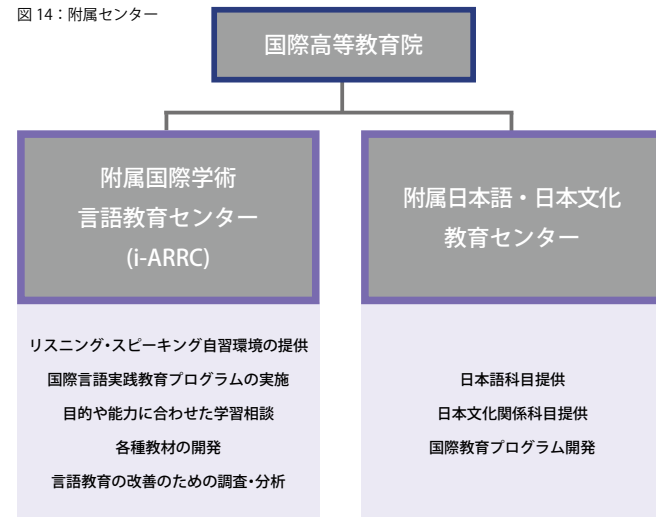
i-ARRCでは、英語を中心とした外国語の能力をさらに向上させたいと希望する学生、あるいは、正課の授業でつまづいている学生に対し、学習相談に応じたり、自習機器や教材アプリの貸し出し、各種講座などのサービスを提供します。また、外国語による討論会やレクチャー、ポスターセッションなどの催し物も企画します。

日本語・日本文化教育センターは、学士課程の留学生に対し日本語や日本文化関連の授業を提供するほか、短期の留学生に対する特別な教育プログラムを提供します。また、センターの教員は、大学の国際教育委員会学生交流推進室の室員として、様々な国際交流事業を支援しています。

なお、学習環境の整備として平成28年に国際人材総合教育棟を新営しました。この建物は、i-ARRCが展開するさまざまな課外学習支援の拠点として機能しますが、同時に、240名定員の講義室2室が設けられるなど、教養・共通教育全体の環境整備にも貢献するものです。板書と併用できるプロジェクタの設置や3人掛けの机を導入するなど、大教室でも対話的な授業を実施しやすくする工夫を行っています。同棟の地階にはCBTルームを設け、留学準備や大学院入試などで本学での需要が増加しているTOEFL iBTについても学内で受験できるようになります。さらに、小グループで自習ができるカンパセーションルームや発表準備、自主勉強会等に使える多目的スペース、個室型のスピーキングコーナーなどを準備し、学生が利用しやすい、快適な学習環境を目指しています。

このほか、人間・環境学研究科総合人間学部図書館を吉田南総合図書館として再編成し、自学自習の拠点である図書館の運営体制を強化しています。また、履修登録などの学務を支援する教務情報システムKULASIS(クラシス)については日本語と英語の2か国語化を行うとともに、個々の授業内での資料配布や課題提出に利用する授業支援システムPandAとの連携を強化しました。全学共通科目では平成27年度に300以上の授業でPandAが利用されています。

図14: 附属センター



対面トレーニングや複数トレーニングが可能なカンパセーションルーム

おわりに

平成28年度からの主な変更点について説明しましたが、教育院では、教養・共通教育の改善に向け、今後も様々な課題を検討する予定です。学生、教職員の皆さんが教養・共通教育に関心をお持ちになり、教育院にご意見をお寄せいただけますと、大変うれしく思います。今後とも、引き続きご協力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。



TOEFL iBT等を学内で受験できるCBTルーム



20の個室ブースを備えるスピーキングコーナー



エントランスホールを兼ね、ポスターセッションも行えるマグネットコーナー



国際人材総合教育棟



発表準備、自主勉強会や文化交流学習等が行える多目的スペース

大いに学んで世界に羽ばたけ

—新しくなった教養・共通教育—

平成28年8月

編集発行 京都大学 国際高等教育院

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp>